

「教育的視点から」

スポーツ振興部長 小澤 治夫

フットボールは「子どもを大人に」、「大人をGentlemanに」育てるという。50年も前に私がサッカーに夢中になっている頃に知った言葉である。「サッカー」「フットボール」を「スポーツ」に置き換えても全く同じであり、スポーツは私たちの人間形成に大きい関わりを持っている。「日常から離れる、気晴らし(deportare:ラテン語)」などの意味から派生した「スポーツ」は我々の人生を豊かにしてくれる文化である。全国で開催されるマラソン大会で、記録を求める人から走る楽しみを享受する人まで、市民ランナーに代表されるようなスポーツ愛好家が増え、スポーツの価値がこれほどまで高くなった時代はない。

しかし一方で、スポーツが肥大化し、勝つことにこだわり過ぎるようになった今、許されるはずもない暴言・暴力、体罰は後を絶たない。過日読んだ論文でも、ある県の高校でのスポーツ中の体罰は10%程度存在すると記載されていた。体罰を経験した人は指導者になった時に体罰を容認する傾向も指摘されている。本学の中西健一郎准教授の調査では、「スポーツやスポーツ指導に満足していますか」との設問にデンマークの子どもたちは96%が「Yes!」と答えている。しかし同じ問いに日本の子どもたちの「Yes!」はわずか6%である。スポーツの価値を高め、スポーツの意義を広げていくことが求められている。静岡産業大学ではそうした活動を、スポーツ教育研究センター、スポーツ医科学研究センター、スポーツ振興部が担っている。



「社会的視点から」

スポーツアドミニストレーター 三浦 哲治

サッカーは、世界で最も盛んなスポーツで、世界中の国々や人々が繋がり、グローバル社会発展に貢献し、人々の人生を幸せにすることができる大切なもの(価値)です。

国際サッカー連盟(FIFA)の加盟国数は211で、国際連盟加盟国数193、国際オリンピック委員会(IOC)承認国数206を凌ぎ、『サッカーのチカラ(価値)』を感じさせます。

世界中のプロ・アマを含めたサッカークラブは、地域住民のものであり、週末はスタジアムに集まり、地域の人々の応援のもとに試合が行われ、そのクラブは、地域住民が、「いつでも」「だれでも」サッカーを「する」「みる」「支える」「知る」ことを楽しめる場所、クラブに関わる全ての人々の人生を豊かにします。そして、ヨーロッパや南米のプロサッカーチームと世界中の企業との間では、1年間70億円以上の金額でスポンサー契約することもあり、そのチームや選手のSNSフォロワー数は、それぞれ2億人を擁し、世界中の「人」「物」「金」「情報」が繋がりビジネスを拡大しています。

また、近年サッカー界は、FIFA管轄のもと、世界各地で多様性を認める社会創りへの貢献として、障害者や女子の普及・振興活動に力を入れ、サッカーを通じた社会貢献に取り組んでいます。

静岡産業大学では、グローバル社会で活躍できる人材育成、スポーツの価値を高めることのできる人材育成を目指しています。



©日本サッカー協会

スポーツを「する」「みる」「ささえる」「しる」から考える

スポーツ科学研究室 研究室長 館 俊樹

文部科学省では、スポーツ基本法の規定に基づき、平成29年3月、第2期「スポーツ基本計画」を策定しました。その基本方針として、つぎの4つを掲げています。

1. スポーツで「人生」が変わる!

3. スポーツで「世界」とつながる!

2. スポーツで「社会」を変える!

4. スポーツで「未来」を創る!

また、この基本計画の中でスポーツを「する人」、「みる人」、「ささえる人」を拡大していくことが示されています。

静岡産業大学スポーツ教育研究センターでは、上記の4方針の実現のため、基本計画の「する人」、「みる人」、「ささえる人」に加え、高等教育機関として「しる人」の拡大に取り組んでいます。静岡産業大学では、運動部活動、愛好会に参加している学生だけで563人のスポーツを「する人」がいます。さらに、スポーツを「みる人」も数多く在籍しており、女子サッカーチームを例にあげると大学に所属している静岡産業大学磐田ボニータの公式戦では1,000人近くの「みる人」が集まります。また、当然「みる人」、「する人」を「ささえる人」も数多く存在しています。わかりやすいところでは、学生によるトレーナー、コーチの活動、スポーツスクール、キッズスクールの指導者、運営スタッフ、部活動の運営を行う主務、大会を運営するスタッフなどが活躍しています。そして、これらの人が本学において「トレーニング演習」、「コンディショニング論」、「スポーツ経営学」、「運動生理学」等の講義や総合型地域スポーツクラブと連携した経験をつむことで、より高い次元でのスポーツ活動を可能としています。

多角的にスポーツを楽しむ!



今回の号では、サッカーをテーマに、「する」「みる」「ささえる」「しる」の視点から考えていきます。



社会科学の分野から

「サッカーファンの特異性：チーム・アイデンティフィケーション」

研究員 住田 健 静岡産業大学講師



人はなぜサッカーファンになるのでしょうか。先行研究では、個人がサッカー（スポーツ）チームのファンになるプロセスに関する理論・概念が提唱されています。例えば、動機、PCM（Psychological Continuum Model）等があげられます。その中でも、今回、注目したい概念がチーム・アイデンティフィケーション（Team Identification: 以後、TIと表記する）です。TIは、サッカーを含むスポーツビジネス分野において、積極的に援用されてきた概念です。TIとは、自己定義（self-definition）に関する概念の一つです。つまり「自分とは何か？」です。人が自己を定義する際、スポーツチームにどれだけ心理的に所属しているかを示したものがTIです。この概念の特徴は、個人がある集団に心理的に所属する際に、個人のアイデンティティが集

団のアイデンティティに統合される（depersonalization）というものです。つまり、TIは、ファンがチームの一部になっていると考えるところがポイントであるとも言えます。このTIが高まると、将来の消費行動を導くだけでなく（Kwon et al., 2007）、近年では、個人の幸福度まで高まる可能性があることも示唆されています（Inoue et al., 2017）。私の研究テーマは、このTIと他の心理的概念との整合性を理論的・実証的に精査していくことです。

「ダービーマッチの利潤最大化」

研究員 谷口 昭彦 静岡産業大学講師

日本におけるサッカーの学術的な研究は、スポーツビジネスなどのテーマで取り上げられることが多く、経済学理論をサッカーに適用したモデルは少ない現状です。スポーツを経済学で分析することのチャレンジも2000年以降、多くの書物が海外で出版されているところを見ると、経済学からのアプローチ自体が「これから」の印象を受けます。本稿では、サッカーのダービーマッチに焦点を当てたモデルを紹介します。ダービーとは同一地域内（都市内）に存在するサッカークラブが、対戦するゲームを言います。

まず、同じ地域に規模の違うクラブがあるとします。観客動員数あるいはサポーター数などの規模の違う2クラブを考えてみましょう。マーケット規模の大きいクラブをAとし、小さいクラブをBとすると、各クラブの収入はマーケット規模だけAがBよりも大きくなります。リーグ戦の勝敗は日本代表選手のようなスター選手の人数に依存し、収入は勝率に依存するとしましょう。勝率を上げるためには収入をスター選手に割り振る必要があり、収入から費用を差し引いた利潤はスター選手をより多く雇用できるAがBよりも大きくなります。すると、サッカーに限らず話題に上がるのはフランチャイズの変更（ホームスタジアムの変更）ということになります。

ビジネスを考えるならばマーケット規模の大きい都市にホームを移転すべきです。実際、メジャーリーグではホームの移転は珍しくありません。しかしながら、日本のサッカーではホーム移転はほとんど行われていません。つまり、利潤以外の要因が存在し、サッカークラブ運営が行われていると考えられます。サッカークラブが地域にあることが社会厚生を増大につながり、地域に貢献するという視点からスポーツを捉えるべきといえます。



自然科学の分野から

「科学がサッカーを進化させる」

研究員 中西 健一郎 静岡産業大学准教授

現代サッカーにおけるトップレベルのフィジカルコーチ（イタリア・プロチーム：ユベントス、男子デンマーク代表チーム）の Jens Bangsbo 博士は「サッカーは科学ではない。しかしながら科学はサッカーを進歩させる。」と述べています。現代サッカーにおいて優れた競技成績をめざすならば科学的根拠に基づいた（evidence based）トレーニングを取り入れたコーチングは不可欠であり、さまざまな最新テクノロジーを活用した手法により、選手を人間の力だけでは到達できないステージへと導いています。

科学的根拠に基づいたコンディショニングを選手に実践するためには、体力テストやコンディション・チェックによる測定評価が土台となります。これまで数多くの選手に実施したデータを活用すれば、アマチュア選手でも自らの体力的な課題やコンディショニングの問題点を確認できます。一方、トッププロ選手が実践しているコンディショニングにおいては、最新のGPS測定器を活用して実際のプレーをデータ化（走行距離やスプリント数）し、分析することで体力向上や傷害予防に役立てています。加えて、一部のチームでは、非観血的な血液検査を実践し、スポーツ貧血の予防など体調管理にも精密な測定機器を利用しています。



「科学的知見をサッカー選手のコンディショニングに活かす」

研究員 江間 諒一 静岡産業大学講師

サッカーの試合中、選手は力強くかつ素早い動きを繰り返します。試合時間の経過とともに筋肉には疲労が生じ、パフォーマンスの低下や怪我のリスクが増える恐れがあります。太腿の裏側に存在し、膝関節を曲げるために活動するハムストリングスは、肉離れなどの怪我が生じやすい筋肉です。試合によって、ハムストリングスが生み出せる力がどのように変化するのかに着目した、最新の研究をご紹介します（Grazioli et al. 2019, Eur J Sport Sci）。ブラジルリーグに所属する男子プロサッカー選手16名を対象としました。試合の前後、全力で膝関節を曲げたときに発揮される力（最大筋力）と出来るだけ速く膝関節を曲げたときに発揮される力（瞬発力）を測定しました。試合後、最大筋力に変化はみられませんでした。瞬発力は10%以上低下していました。その低下は、膝関節を深く曲げた姿勢ではなく、怪我が生じやすいと考えられている、膝関節を少しだけ曲げた姿勢で生じていました。この知見をもとに考えると、試合や後に瞬発力が低下していないかどうかを調べたり、瞬発力を高めるトレーニングを取り入れたりすることで、パフォーマンスの低下や怪我の発生を防ぐことにつながる事が期待できます。

